

基 調 講 演

【Room 1】 9：45～10：45

コロナ禍における研究および教育について

近藤暁子（第5回学術集会大会長・東京医科歯科大学大学院）
新津晃右（ワシントン大学）

司会：森淑江（日本国際看護学会理事長，群馬大学名誉教授）

基調講演「コロナ禍における研究および教育について」

日本国際看護学会第5回学術集会会長
近藤 暁子（東京医科歯科大学大学院）

2020年に引き続き2021年度も新型コロナウイルス感染症流行のため、社会・経済的にも大きな影響を受けている。大学における研究活動も制限され、教育においてもオンラインによる講義や病院実習の制限が続いている。また、海外研修など異文化に触れる機会も制限されており教育効果の低下が懸念される。一方で、オンラインにより、外国の大学との共同研究・講義が容易に可能となり、新たな研究・教育方法への展開も期待されている。

筆者は科学研究費基盤（C）において2019年度に「看護学生のコントロール感と健康行動との関連について日米比較」というテーマで研究費を取得し、ワシントン大学との共同研究の準備を行っていた。調査方法は紙ベースの方が回収率が高いことが予想されたが、米国ではオンラインでの調査が一般的であるため、調査方法を統一するために、オンラインでの調査を準備していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、通常での健康行動を調査するよりも、コロナウイルス流行下での看護学生の感染予防行動を調査する方が今後の感染予防に関する教育に有益であると考え、「新型コロナウイルス流行下での看護学生の健康行動とコントロール感、主観的健康管理能力との関係について日米比較」とし、調査内容を変更してGoogle formを使用して両国で調査を実施した。

ワシントン大学との関係については、筆者は2008年にワシントン大学看護学部博士課程を修了し、東京医科歯科大学の国際看護開発学分野に着任した2015年より2019年まで毎年夏期海外研修にて学生とともに訪問していた。ワシントン大学ボセル校には、筆者の博士課程の時のクラスメートが勤務しているため、訪問時講義を聴講させていただく機会を得た。ワシントン大学ボセル校では外国の大学と共同講義 Collaborative Online International Learning (COIL) が開始され、本学の看護学専攻も参加することとなった。ボセル校の日本出身の新津晃右講師とともに、2019年12月から計画し、2020年春学期にZOOMを使用した共同講義を本学の2~4年生で受講可能な自由科目である「実践看護英語」にて行う準備をしていた。その後新型コロナウイルス感染症流行のため、本学は2020年4月以降すべて講義はオンラインで行うこととなったが、予定していたオンラインでの共同講義はコロナウイルス流行の影響を受けることなく予定通り実施できた。ワシントン大学で共同講義を行ったのは、“Resilience and Mental Health”という選択科目で、看護学生に限らず、Health studiesの学部生が学年を問わず受講可能な科目である。

日本人は学校で長年英語を学んでいても使用する機会があまりないために残念ながら受験が終わると忘れてしまうのが一般的であると考えられる。したがって、このような機会をより多く持ち、普段から普通に英語でコミュニケーションをとることに慣れていく必要がある。日本は島国であり、海外との交流は容易ではないが、このようなオンラインを通じた交流であれば比較的安価で手軽に実施可能である。コロナの影響で諸々教育機会が制限されているが、逆にオンラインを使用することにより海外が近くなり、交流を深める機会になった。今後もこのような機会を増やし、看護学生の異文化に触れる機会を持ち、コミュニケーション力の維持向上に貢献できるように努めていきたいと考えている。

その他の筆者の担当の授業についても、学部・大学院ともに全てZOOMを使用して行った。学部4年生の総合実習Iは通常2週間病棟実習を行うが、2020年度は1日病棟でシャドウイングを行ったのみであった。その他の日程はZOOMによる臨床看護師の方から多職種連携チームに関する講義、緩和ケア看護・国際看護についての事例検討を行った。実習では1つの部署に行きチーム医療に関して学ぶが、講義に変更することですべての部署のチーム医療について学ぶことができたことと学生からは好評であった。緩和ケア看護では学生同士によるロールプレイを通してコミュニケーションの方法を学んだ。国際看護では留学生に患者・家族役を演じてもらい、やさしい日本語を使用してコミュニケーションを取り、情報収集・アセスメント・看護ケア計画立案まで実施した。

以上のようにオンラインを使用することで今までと勝るとも劣らない方法で研究・教育が実施できていると感じている。with コロナで培った経験を生かして今後after コロナもさらに発展できるよう努力して行きたいと考えている。

基調講演「Collaborative Online International Learning (COIL)を 通しての日米オンライン合同授業」

新津晃右（ワシントン大学ボセル校）

近藤暁子教授の基調講演で紹介された通り、筆者は2019年の夏に、東京医科歯科大学の学生がワシントン大学へ海外研修に来た際に、近藤教授と出会うことができた。同じ看護留学生としての経験を持つ者通し意気投合し、東京医科歯科大学看護学部とワシントン大学ボセル校看護健康学部との交流が始まった。2019年12月に筆者が日本に一時帰国した際には、東京医科歯科大学での講演会に招待され、講演後に近藤教授と日米間での合同授業の案を話し合い、その後数ヶ月かけて案を具現化した。2020年春学期に初めての合同授業を施行し、2021年冬学期、そして2021年春学期と、今までに3回の合同授業が実現した。今回の基調講演で紹介する内容は、2021年春学期に行われた授業内容の報告である。

我々が行ってきた合同授業は、正式にはCollaborative Online International Learning(COIL)として知られているものであり、看護に限らずビジネス学や芸術学などの他の分野でも、また日米間に限らず世界各国でパートナーシップに基づき盛んに行われている。COILは別名「virtual study abroad」としても知られ、実際に外国を訪れることなく、オンライン上で現地の生徒と共に学び合う機会を提供し、異文化間での相互理解を深めようという教育方法である。近藤教授の基調講演でも指摘された通り、昨年そして今年と新型コロナウイルス感染流行と重なってしまったが、オンライン上での交流という特性を活かすことができ、ウイルス感染のリスクもなく安全に行うことができた。

COILを行う方法として、基本的には各大学の授業カリキュラムの4週間程度授業内容を重ね合わせる必要があるため、比較的柔軟に自由に対応できるクラスが望まれた。そこで、東京医科歯科大学では「実践看護英語」、そしてワシントン大学では「Resilience & Mental Health」の授業が、内容に加えスケジュールやタイミングなど様々な点を考慮しても理想ではないかと想定され、これらの授業にCOILを取り入れることが決まった。成績や採点は、各大学のインストラクターがそれぞれの学生を担当する。

東京医科歯科大学はsemester制度（1年間に3学期）であるのに対して、ワシントン大学はquarter制度（1年間に4学期）を採用しているため、春学期開始時期と終了時期に若干のズレが生じたが、その点はOnline Discussionという非同期式の特性を活かすことによって解決した。ワシントン大学では3月下旬に一足早く春学期が始まったが、最初の宿題としてオンライン上で自己紹介をした。Online DiscussionにはPadletというプログラムを使い、CanvasなどのLearning Management Systemsは生徒を登録する必要があるが、PadletはURLをシェアすれば良いだけなので、他大学とCOILを行う際に非常に便利であった。Padletを使って自己紹介のページを用意し、3月下旬～4月上旬にワシントン大学の学生が自己紹介を行った後、そのURLを東京医科歯科大学の学生と共有し、4月中旬に東京医科歯科大学で春学期が始まった際に、Padlet上での自己紹介を最初の宿題とした。4月下旬までには東京医科歯科大学の学生も自己紹介を終え、それぞれの都合の良い時にオンライン上で質疑応答が行われた。

自己紹介を終え、Padletを使った非同期型の学びを通してお互いのことをよく知り合った後、5月中旬から6月上旬まで、Zoomを使った同期型の学びが行われた。「実践看護英語」の授業が日本時間で水曜日の午前8時50分～10時20分まで行われていたため、ワシントン大学の学生はアメリカ西海岸時間の火曜日午後4時50分～6時20分まで、週一回Zoomでの合同授業に参加し、合計4回の同期型の授業が行われた。最初の2回は、近藤教授とTAのアブリエジ氏と筆者の3人によるプレゼンテーションが行われ、日本やアメリカの文化、そしてTAの祖国であるウィグル文化などが紹介された。また、ワシントン大学での授業はレジリエンスというトピックであることもあり、プレゼンテーションの後にZoom Breakout Roomsを通して、各国独特の宗教観やストレス対処法などが学生間で議論された。

最後の2回のZoomを使っての同期型合同授業は、東京医科歯科大学とワシントン大学の学生による合同プロジェクトの発表会が行われた。災害や貧困など6つのテーマに基づきグループ分けがされ、それぞれのグループがそのテーマに対してどうレジリエンスを発揮できるか、科学的エビデンスや自己体験談など資料を集め、Google Sitesを使ってホームページを作り上げた。ZoomのScreen Sharing機能を使って、二日間にわたり6つのグループのホームページを共に閲覧し、各グループによる発表の後質疑応答の機会が設けられた。マイクを使って発言する学生もいれば、Chatを使って質問する者もいた。

COILは比較的安価にそして安全に行うことができ、なおかつ異文化間の相互理解も深まるという画期的な教育方法である。今後とも同じクラスで、またその他の授業でも採用できないか検討している。